2018年12月1日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第4章21～30節

・引用：第2章2,3,11節、第3章1,2節、第4章33,34,35,36,37,41,42節、第5章1節

　今年最後のクラスになりました。

前回の講話の最後に、『バガヴァッド・ギーター』第5章の冒頭部分について少し触れましたが、今回から本格的に第5章について説明していきます。

第5章はアルジュナの質問から始まります。

アルジュナは自分が混乱しているのでクリシュナに質問します。

普通はどんな状況で混乱が生じるのでしょうか？

学ぶ側の問題点としては、居眠りして集中して話を聞いていない、頭のレベルが低くて理解できない、などがありますが、ここにいる皆さんはそんなことはありません。

もちろんアルジュナは敬意をもってクリシュナの話に集中していますし、言うまでもなく知的レベルについては優れています。

混乱が起こるのは、前に聞いた話と後で聞いた話の間に矛盾があると感じた場合や、教師の話を普通の意味で受け取り、その言葉の深い意味を分からないまま理解したつもりになっている場合などです。

いっぽう教える側の問題点としては、教師自身が教える内容についてきちんと把握していないなら、生徒が正しく理解できるはずはありません。

教師が混乱していれば当然生徒も混乱します。

もちろんシュリ・クリシュナがそんな教師であるはずはなく、彼は教師の中の教師、世界一の霊的教師です。

最高の教師がとても優秀な生徒に教えているのに疑問が起こっていて、それは疑問がただ単に「矛盾を感じるから」という理論上(theoritical)の疑問に留まらず、現実的に「これからどうすべきか？」というアルジュナ自身の生き方に大いに関係しているからです。

シュリ・クリシュナの答えを聞いてそれでおしまいというわけではなく、アルジュナはその教えに従って行動します。

必然的にアルジュナの疑問は浅い興味から発しているのではなく、混乱も深刻です。

なぜならアルジュナの置かれている場所は戦場であり、彼は「戦うか、戦わないか」を決めなければなりません。

アルジュナはとても純粋で聡明な人間であり高名な戦士ですが、いま重大な決断を迫られているのです。

マハーバーラタの舞台はクルクシェートラという戦場です。

アルジュナやその兄弟はパーンダヴァというグループであり、敵対する勢力はカウラヴァと呼ばれていましたが、両者は親戚同士でした。

アルジュナは敵側にいる友人、親戚、師を戦いの中で殺してしまうかも知れないことを考え、悲しんでいました。同時にそれによって自分が罪を犯してしまうことを怖れていました。

**悲しみと怖れ**、この二つの理由でアルジュナは戦いたくないと考えていました。

『バガヴァッド・ギーター』の第1章はこのような状況で始まります。

そのアルジュナに対してクリシュナは、「アルジュナよ！あなたの心はいま幻惑された無知の状態にある。本当の知識、自分の義務、人生の目的、正しい態度について考えなさい」と教えます。そこから、本当の人生の目的、人間の本性、真理とは何か、真理を悟る方法についてシュリ・クリシュナの説明が始まります。

その話をアルジュナは尊敬の心で集中して聞いてはいましたが、いくつか理解できない部分がありました。そしてアルジュナの混乱は、この第5章で初めて起ったのではありません。

たとえば第3章1節を見てください。

***アルジュナが申します。『ジャナールダナ(クリシュナ)様！果報を求める行為よりも知性を磨く方がよいというのがあなたのお考えなら、なぜ私に、このような恐ろしい戦いをせよ、とおっしゃるのですか？　おお、ケーシャヴァ様！//3-1***

この第3章に先立つ第2章で、シュリ・クリシュナが長い時間をかけてアートマンとその本性について説いていたのを、皆さんは覚えているでしょうか？

・アートマンは殺せないし、斬れないし、燃やすこともできませんが、体は生まれて、育って、衰えて、無くなります。

・体は変化しますが、アートマンは変化しません。

・体は一時的ですが、アートマンは永遠で無限です。

・我々が古い服を脱いで新しい服に着替えるように、アートマンも古い肉体を捨てて新しい体に入るのです。

・喜び/悲しみ、暑い/寒い、快楽/苦痛、などすべては体にとっての問題であり、アートマンは何も経験しません。

・あなたは自分を肉体と同一視しないで、アートマンのことを考えてください。

・自分を肉体と同一視すれば、肉体がなくなればあなたもなくなります。

・そしてあなたが親戚を殺してその肉体がなくなると、親戚もなくなることになり、あなたは罪の意識に苦しみます。

・親戚の本性も体ではなく、その肉体がなくなった後もあなたの親戚のアートマンは続きます。

・このように識別するなら、あなたには苦しみも悲しみもありません。

というように、第2章ではアートマンについていろいろと説明があったのを覚えていますか？

第2章11節を見てください。

***至高者クリシュナが言われます。『君はもっともらしいことを言っているが、悲しむ価値のないことを悲しんでいるに過ぎぬ。しかし、真の賢者は、生も死も悲しまないものだ。//2-11***

肉体がなくなってもその人はなくなっていない、というのはインド哲学のエッセンスではなかったでしょうか。肉体の死が人の死であるという一般の考え方とは正反対です。

『ウパニシャッド』、『バガヴァッド・ギーター』、『バーガヴァタム』の教える内容はこの一点に尽きる、と言っても過言ではありません。

我々は本当は魂であり、永遠で無限です。

我々の肉体は病気にかかりそしてなくなりますが、我々はなくなりません。

自分を肉体と同一視している限り、悲しみ、苦しみ、怖れから逃れることは決してできません。

人生の目的とは、「私は肉体である」というこのたったひとつの無知をなくすことです。

「体が変化しても私は変化しない、体がなくなっても私はなくならない」という知識を得ることだけが人生の目的なのですが、実はそれが一番難しいことなのです。

すべての聖典のエッセンスはこの簡単に聞こえる教えなのですが、それが最も難しいことなのであり、これに比べれば科学上の問題などは大した難問ではありません。

シュリ・クリシュナは少しからかうような口調で、アルジュナに対して「君は賢者のように喋っているが、実は無知なのだ」と諭します。

翻訳では、*『君はもっともらしいことを言っているが、・・・』*となっています。

アルジュナはあろうことか神であるシュリ・クリシュナに対して、「親族を殺すと罪を犯すことになる、地獄に堕ちてしまう、カーストが崩壊してしまう、一族の婦人たちは堕落してしまう」などと長々とレクチャーをします。全知の神に対して講釈を垂れるのは馬鹿げています。

第2章2節、3節を読んでください。

***至高者クリシュナが語られます。『アルジュナよ！　こんな大事な時に、君のどこからそんな弱気が出てくるのだ。高貴な家柄の君らしくもない。そんなことでは高い天界に行けず、不名誉なままで下界に堕ちてしまうことになるぞ。//2-2***

***プリター妃の息子(アルジュナ)よ！　そんな態度は、男らしくもないし、まったく君にはふさわしくない。さあ、弱気を捨てて立ち上がりなさい。敵を撃破する勇者(アルジュナ)よ！』と。//2-3***

第2章11節に到る前にシュリ・クリシュナは既に、「無知の幻惑にとらわれないで戦いなさい」とアルジュナを諭しています。しかしそれでもアルジュナは戦いたくないと言います。

この最愛の友であるアルジュナの頑なな態度を見て、シュリ・クリシュナは「あなたは賢いように話しているが、実際は無知だ」とからかいます。

第2章でクリシュナはアルジュナに対しアートマンについて教えていますが、第2章の最後の部分では、**スティータプラッギャー**(Sthitaprajna)について説明します。

スティータプラッギャーは**「知性に安定した状態」**のことであり、この状態の人は肉体を持ちながら解脱することができ、そのような人は**ジーヴァンムクタ**と呼ばれます。

プラッギャーは知性・知識のことであり、スティータは安定しているという意味です。

ですからスティータプラッギャーは英語では、「established in wisdom」、と表現される状態のことです。

アルジュナの求めに応じて、シュリ・クリシュナはスティータプラッギャーの状態にある人が持つ特徴について説明しました。

そのような人は心に何も願いがなく、自己充足の喜びに浸っていて他の人や他のものを必要としません。我々の普通の楽しみのためには、自分以外の人やものが必要です。

食べ物がなければ食事の喜びがなく、景色がなければそれを見て楽しむことはできませんし、友人がいなければ彼らと付き合う喜びもありません。

普通の人間はすべての楽しみ喜びを、自分以外の外部の人やものに依存しています。

スティータプラッギャーはこの反対で、喜びの源は外ではなく自分の中にあります。

心が自己のアートマンに安住しています。「アートマニ　エーヴァ・・・」*(第6章18節参照)*

何故ならアートマンの本性はサッチダーナンダ(サット・チット・アーナンダ)であり、アーナンダは至福のことだからです。

**自己充足の喜びとは至福の経験**という意味です。

たとえば気が狂った人は何の理由もなく笑っていることがありますが、それは至福を経験しているわけではなく病気であり、スティータプラッギャーはそれとは違います。

**アートマラーマ**(Atmarama)　：アートマンの喜びに浸る

**アートマクリラ**(Atmakrira) ：アートマンで遊ぶ

という素晴らしい言葉があります。ラーマは喜び、クリラは遊びのことです。

普通の人は他の人や他のものがなければ遊べません。

しかしスティータプラッギャーは自分の魂と遊べます。

*(註:スティータプラッギャーについては2016年4月の講話でも説明されています)*

アートマンの本性、アートマンの喜び、スティータプラッギャーなど、シュリ・クリシュナがアルジュナにした話は、皆ギャーナについての説明です。

しかしクリシュナがアルジュナに命じているのは、「戦いなさい」ということであり、ここにアルジュナは矛盾を感じているのです。

最初に「戦いなさい」と言った後は、ずっとギャーナの話ばかりが続きます。

戦いはカルマ(働き)なのに、そのための助言の内容はすべてギャーナについてです。

クリシュナが説明してもアルジュナは混乱する、また説明してもまた混乱する、ということが続いて第5章に到るのです。

***アルジュナが問います。『おお、クリシュナ様！ あなた様は、初めに仕事を離れよと私におっしゃり、次には、奉仕の精神で活動せよと勧められました。いったいどちらが本当に正しいのか、はっきりとお示し下さい』と。//5-1***

「カルマなのか、ギャーナなのか」でアルジュナは混乱していますが、この疑問は第3章にも出てくるので比べてみてください。

***アルジュナが申します。『ジャナールダナ(クリシュナ)様！果報を求める行為よりも知性を磨く方がよいというのがあなたのお考えなら、なぜ私に、このような恐ろしい戦いをせよ、とおっしゃるのですか？　おお、ケーシャヴァ様！//3-1***

***あなた様が矛盾するようなことをおっしゃるので、私の心は今とまどっております。どうぞ私に最善の道を一つだけ、はっきりとお示し下さい』と。//3-2***

この第2節には、シュレーヨーハム(sreyoham)、先ほどの第5章1節にも、ヤッ チュレーヤ(Yac chreya)という表現が出てきます。

いずれも幸福(well-being)を意味するスレーヤが転じた言葉です。

翻訳ではそれぞれ、*「最善の道」*、*「どちらが本当に正しいのか」*となっています。

アルジュナの疑問は「どちらが正しいのか？」という単なる理論上の興味からではなく、「カルマとギャーナのどちらを**自分は選択するべきなのか？**(自分が幸せになるのか)」という彼個人の切実な悩みから発しています。

まず最初にカルマとギャーナは相反する、という基本を押さえておきます。

一人の人間が同時に東と西に向かって進むことはできますか？　もちろん不可能です。

東か西かどちらに行くのかまず決めておかなければなりません。

同じようにカルマとギャーナでは目的は一緒なのですが、方法が違うのです。

カルマは働きであり仕事をしなければなりませんか、ギャーナは働きをやめなければなりません。これに関して二つの概念があります。

**①行為者と享受者**

　Katri-tva(カットリットワ) 　:行為をする

　Bhoktri-tva(ボクトリットワ) ：行為の結果を楽しむ

「私が働く」という行為の主体者の意識と「私はその働きの結果を楽しむ」という経験者の意識、この二つの意識がカルマには必ず付随しています。

Bhoktri-tvaは楽しみを意味するbhoga(ボーガ)に由来しています。

この二つの意識がないとカルマの意欲が湧きません。

**②分離意識**(Bheda-jnana:ベーダ・ギャーナ)

　働く私、仕事、仕事の対象、仕事の目的、この4つがそれぞれ別々であるという意識です。

私は働く人であって、働きそのものではありません。

私と仕事は別のものであり、そうでなければ仕事はできません。

また私と他の働く人は違うのであり、そうでなければ誰が仕事をしているのかわかりません。

仕事の対象とは、たとえば運転という働きについて言えば自動車のことであり、書き物をする時はペンや紙を使いますし、大工が仕事をする時は大工道具や材木が仕事の対象です。

仕事の目的とは「誰のために、何のために」ということであり、食事を作るのは子供たちに食べさせるため、というのがその一例です。

たとえば気の狂った人も働きをしますが、そこには目的がありません。

インドでも日本と同じように米から酒を造りますが、その際に土器の壺を使います。

壺に米を入れて発酵させて酒を造るのですが、酒が出来た後使い終わった壺は捨てられます。

ある狂人が木の棒で朝からその捨てられた壺を壊し続けて、夕方になると疲れ果ててやめてしまいました。人に聞かれてもなぜそんなことをするのか答えられません。

これは例外的な目的を持たない働きですが、普通の人には仕事をする目的があります。

ただし自分なりに目的を持って働いているつもりの我々も、よく考えてみるとこの狂人のことを笑えません。本当に重要な仕事とそうでない仕事との区別がついていないからです。

朝から晩まであまり大事ではない仕事をして、瞑想や祈りなどの時間が無くなっています。

何が大事か、あまり大事ではないことは何か、何が全く無駄か、を識別できないからそうなるのです。賢い人はこの識別ができています。

行為の主体者とその結果を楽しむ人、そして仕事は4つの別々の要素から成り立っている、という二つの概念がカルマを考える上で必要です。

いっぽうギャーナ・ヨーガにはカットリットワもボクトリットワもベーダ・ギャーナもなく、必然的に仕事はできません。

魂(純粋な意識)という観点からは、仕事をする人もそれを楽しむ人も存在しません。

肉体があるのでカットリットワやボクトリットワがあるのであって、肉体を持たない純粋な魂にはカットリットワもボクトリットワもベーダ・ギャーナもありません。

アートマン以外には何もなくすべてはアートマンである、というのがギャーナ・ヨーガです。

このようにカルマとギャーナは対立するので、「戦いなさい」と言いながらシュリ・クリシュナがギャーナについて語っている事に、アルジュナは混乱するのです。

これから説明していく第5章の話は、すべてこのアルジュナの混乱を解決するためのものなので、このポイントをきちんと押さえておいてください。

これからもっと深い話になっていくので、最初に何のためにシュリ・クリシュナがこの第5章の教えを語るのか、基礎的な部分を理解しておいてください。

何か分からないところがあれば、今のうちに確認しておいてください。

参加者:(魂が)肉体に入っているから①行為者と享受者、②分離意識、があるのですか？

「肉体に入っているから」ではなく、「自分を肉体と同一視している」からです。

参加者:自分の本性は純粋意識なので、本当は①も②もないということですか？

魂意識の状態にある時には肉体意識はありませんし、その逆も言えます。

たとえば男性/女性という点から考えると、女性の肉体を持っているなら男性意識は持てませんし、男性意識があるなら女性意識は持てません。二つの意識は共存できません。

肉体意識があれば魂意識はありませんし、魂意識のある時には肉体意識はありません。

肉体意識があるけれどもちょっとだけ魂意識があるということは不可能であり、それが起こる時は肉体意識を忘れた時です。

参加者:クリシュナは悟った人でもあるにもかかわらず、多くの活動をしたのですが？

間違えないでほしいのですが、今はギャーナと対比させて単にカルマのレベルについて説明しているのであって、カルマ・ヨーガのレベルの話をしているのではありません。

今説明しているのはカルマについてであって、カルマ・ヨーガについてではありません。

道のことを説明しているのであり、まだ目的については話していません。

*(註：ギャーナ・ヨーガもカルマ・ヨーガも目的は悟りです。東の道を進んでも西の道を進んでも最終到達点は同じです)*

重要なのは魂意識と肉体意識は共存できないということであり、この点でシュリ・クリシュナのこれまでの説明(特に第4章)を聞いたアルジュナが混乱するのも、無理からぬことなのです。

『バガヴァッド・ギーター』は哲学の本であり聖典であり、そのテーマは真理です。

物語としては、これから戦いに臨むアルジュナに対するシュリ・クリシュナの教え、という体裁を取ってはいますが、このマハーバーラタの戦いの時だけでなく、またアルジュナひとりに対してだけではなく、すべての皆さんに対する時を超えた永遠で普遍的な教えとなっています。

キリスト教もヒンズー教も関係なく、真理について語っているのです。

同時に『バガヴァッド・ギーター』には真理についての説明に留まらず、そこ(悟り＝真理)に皆さんを導く教えが書かれています。

皆さんは単にアートマンについて理解するだけではなく、スティータプラッギャーにならねばならず、そうしなければ苦しみ、悲しみはなくなりません。無知や幻惑はなくなりません。

その『バガヴァッド・ギーター』にはギャーナ・ヨーガやカルマ・ヨーガだけでなく、バクティ・ヨーガやラージャ・ヨーガについても書かれています。

それはただひとつのヨーガがすべての人に向いている、とは考えないからです。

ここがヒンズー教と他の宗教が違うところで、他の宗教では提示される方法はひとつかふたつに限定されます。

ヒンズー教は、人によって個性や好みが違うので適している方法も人それぞれである、と考えます。ですから皆さんが進む道には選択肢に幅があります。

たとえば身に付ける衣服や靴についても、皆さんの好みは各人違うのではないでしょうか？

これは食事についても言えることで、皆が同じものを好きなわけではなく、多様性(ヴァラエティ)は自然なことです。

真理を悟るための方法もひとつだけではなく、いくつかあったほうが良くはありませんか？

これは皆さんが自分の性格を観察してみれば自分で分かります。

あるタイプの人は仕事が大好きで、一秒たりとも仕事から離れられません。

仕事がなくても自分から仕事を探し求め、休日でも休むことができません。

別のタイプは感情豊かで、いつも感情のレベルで生きています。

またずっとひとつの場所に留まってあまり動くのを好まず、かといって眠っているわけではなく、考え続けるのが好きな人がいます。

そして哲学者タイプの人は何が真理か、実在なのかを研究したいと考えます。

彼らに適しているヨーガはたとえば、

仕事人間 :カルマ・ヨーガ

感情豊かな人 :バクティ・ヨーガ

動かない人 :ラージャ・ヨーガ

哲学者タイプ :ギャーナ・ヨーガ

というように大別できるかもしれません。

ここでとても重要なことがあります。

**すべてのヨーガはそれ単独で成り立っているのではなく、それぞれに他のヨーガの要素が混在しているのです。**

「カルマ・ヨーガにもバクティ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガの要素がある」というように、あるヨーガには他の3つのヨーガの要素が含まれています。

すべてのヨーガで4種類の実践が必要です。

ヨーガの最終目的は真理(悟り)なので、どのヨーガを選択しても識別は必要です。

まずは真理とは何かを知っておかなくてはなりません。(ギャーナ・ヨーガ)

そして集中しなければ何もできません。(ラージャ・ヨーガ)

また愛も必要です。(バクティ・ヨーガ)

どんなヨーガでも自分が理想とするゴール(目的)を愛していなければ、やる気も起らず前に進めません。

最後にどのヨーガを選択しても働かなくてはならず、頭の中で想像するだけではヨーガはできません。(カルマ・ヨーガ)

聖典の勉強やスラヴァナ、マナナも働きであり、怠け者は何もできません。

もちろん働きにも肉体、心、知性などいろいろなレベルがありますが、働きは必要です。

先ほども言ったように、どのヨーガにもすべてのヨーガの要素が混在しているのですが、それなら**なぜヨーガの名称に区別があるのかと言えば、それはどの要素が強調されているかによって分けているからです。**

ギャーナ・ヨーガでは識別が強調されますし、バクティ・ヨーガでは愛や神、ラージャ・ヨーガでは瞑想、カルマ・ヨーガでは働きが強調されます。

さて、どのヨーガも「単独で成り立っているのではない(exclusive ではない)」ことを理解した上で、次の問題は「では、自分にとってどのヨーガがふさわしいか？」ということです。

アルジュナもクリシュナに、「ギャーナ・ヨーガとカルマ・ヨーガのうち、私にとってどちらが重要ですか？」と質問しています。

アルジュナは単に哲学上の知的興味からではなく、自分にとっての切迫した問題としてこのことをクリシュナに聞いています。彼は戦うか否かを決めなければならないのです。

アルジュナが質問するに至ったバックグラウンドについて、理解できたでしょうか？

一見矛盾しているように聞こえるクリシュナの言葉に、アルジュナは戸惑っています。

(*「あなた様は、初めに仕事を離れよと私におっしゃり、次には、奉仕の精神で活動せよと勧められました」//5-1*)

では第5章に至るまでクリシュナがギャーナとカルマについてどのように語っていたのか、またそれを聞いたアルジュナがどうして混乱したのか、第4章33～37節を見てみましょう。

ここではシュリ・クリシュナは一貫して、「仕事をやめなさい」と語っています。

***敵を撃滅する者(アルジュナ)よ！　物品の供犠より、智識の供犠の方がはるかに優れている。何故なら、プリター妃の息子(アルジュナ)よ！　すべての活動は、究極的には超越智識に通じているのだから。//4-33***

分かりますか？　ギャーナ・ヨーガが最上だと言っています。

そのギャーナをどのようにしたら理解できるかが次の節です。

***真理を体得した賢者をうやうやしく礼拝し、真心をもって仕え、真理を学ぶがいい。そうした聖師のみが、弟子に無上の知識を授けることができるのだから。//4-34***

ギャーナをどうしたら理解できるかの説明であり、賢者から学べと教えています。

***パーンドゥの息子(アルジュナ)よ！　無上の智識を得ることで、君は再びこのような迷いに陥ることはなくなるであろう。何故なら、全宇宙の一切が君の真我の中に在り、かつ私の中にもあることを知るに至るからだ。//4-35***

すべてのものの中に自己のアートマンを見、すべての生き物の中に自己のアートマンを見る。

これはギャーナ・ヨーガそのものであり、「すべてはアートマン」ということです。

***たとえ君が極悪の罪人だとしても、この大智の舟に乗るならば、あらゆる苦痛と不幸の大海を、難なく渡りきって行けるであろう。//4-36***

ギャーナは舟だと言い、ギャーナの素晴らしさを強調しています。

アルジュナがギャーナ・ヨーガこそ最高だと考えてしまうのも、無理はありません。

最初のほうでは「戦いなさい！」(第2章)と言いながら、ここでは「ギャーナが一番だ」と賞賛しています。

***おおアルジュナよ！　燃えさかる炎が、薪を焼き尽くして灰にするように、この智慧の火も、あらゆる行為の業報を焼き尽くして、灰にしてしまうのだ。//4-37***

「すべての活動をやめなさい、悟った師に学びなさい、静かな場所で真理について考えなさい」という言葉を聞いて、もともと戦いたくないという気持ちを持っていたアルジュナが、自分のカルマ(戦い)を捨ててギャーナの道を進むべきではないのか？という印象を持つのは自然です。

しかしながら次の41節でクリシュナは、「カルマをやめなさい」とは言っておらず、カルマをしていながら自由でいる人について話しています。

***果報を求めずに働く人、大智によって疑いを捨てた人、自己の本性に徹して自由自在となった人、この人たちは、カルマに決して縛られることはない。おお、富の征服者(アルジュナ)よ！//4-41***

そして42節です。

***されば、バーラタ王の子孫(アルジュナ)よ！　己の心の迷いと疑いを智識の剣で断ち切り、精神をヨーガに集中し、さあ、立ち上がって戦いなさい！』と。//4-42***

シュリ・クリシュナはまた、「アルジュナよ、頑張って戦いなさい」と言っていて、アルジュナが混乱するのは自然です。

ポイントは「カルマをやめないように」なのですが、さらに深い意味で「どのような態度でカルマをすべきか」をこれから説明します。

カルマをする人(働く人)には種類があります。

**①Prakrita**(プラクリタ)

　自分の願望を達成するために働く人のことです。

自分のする仕事が道徳的か非道徳かは気にしません。

その仕事をすることで、「最初はよくても後になって苦しむかもしれない」とは考えません。

働きに高い目的はなく、自分の願いを叶えることだけを考えています。

このような人は聖典では、プラクリタ(**無知な人**)と呼ばれます。

このような人は多くいます。

**②Karmi**(カルミー)

　**どのような仕事をすべきか、またすべきでないかは聖典の勉強を通して理解しています**。

以前仕事について分類しましたが、覚えていますか？

**カルマ**(Karma:すべき仕事)、**ヴィカルマ**(Vikarma:非道徳的な仕事)、**アカルマ**(Akarma:無活動)。

どんな仕事がそれらに該当するのか、聖典の中に詳しい記述があります。

たとえば、スワミ・ヴィヴェーカーナンダがその著書『カルマ・ヨーガ』の中でもよく引用している『マハーニルヴァーナ・タントラ』(Mahanirvana Tantra)には、家住者である夫、妻、子供たちは何をすべきかなど、詳しく書かれています。

カルミーには欲望はありますがすべてを満足させようとはせず、ヴィカルマはしません。

聖典のガイドに従い、時には仕事をしないこともあります。

ただし高い目的意識を持って仕事をしているわけではありません。

**③Karma Yogi**(カルマ・ヨーギ)

　**真理は何かを理解し、その目的のために働く高いレベルの人達です。**

苦行をすることもあります。

先ほどの第4章41節の言葉、ヨーガ・サンニャスタ・カルマーナン(Yoga-samnyasta-karmanam)とカルマ・ヨーギは同じ意味です。

この人達のするカルマはアカルマになっています。

彼らはカルマをしていても、そこには「行為者と享受者」(カットリットワ、ボクトリットワ)の意識がありません。

彼らは仕事をしていながら、**「プラクリティ(3つのグナ)の影響で、私の体、感覚、心は働いているが、私(魂)は働いていない」**と知っています。

注意してください、彼らは働いています。カルマをやめてはいません。

ギャーナ・ヨーギはカルマをしませんが、カルマ・ヨーギはカルマをします。

ですが「私が仕事をする」という意識はカルマ・ヨーギにはありません。

第三者からは普通にカルマをしているように見えても、実際はカルマをしていながらカルマをしていない(アカルマ)のです。これが悟った人のしるしです。

もちろん、カルマ・ヨーギも最初からそのような高いレベルにいるわけではありませんが、もし本当に「カルマをしているのは私ではない」と感じるようになったら、次の段階はカルマ・サンニャーサです。

**④Karma-samnyasa**(カルマ・サンニャーサ)

　この状態になると、外から見ても活動していません。

先ほどの自己充足(アートマラーマ、アートマクリラ) の状態です。

以上、カルマをする人を分類しました。

もう一度第4章41節を見てください。

***果報を求めずに働く人、大智によって疑いを捨てた人、自己の本性に徹して自由自在となった人、この人たちは、カルマに決して縛られることはない。おお、富の征服者(アルジュナ)よ！//4-41***

ここでは働きをやめないのに自由な人について語られていますが、それは「行為者と享受者」の感覚がないからです。カットリットワ、ボクトリットワがなければ、執着は生じません。

どうかこの状態で仕事をしてください。

シュリ・クリシュナがアルジュナに「戦いなさい！」と言う時、この状態にあることが前提となっています。

「戦いに勝利すれば王国が手に入る、天国に行ける、などの結果のことは考えずに戦いなさい」と言っています。

仕事の結果に執着せずに行うカルマは、アカルマになります。

ギャーナ・ヨーガがカルマをやめるのに対し、カルマ・ヨーガはカルマを続けますが、この執着をしないということがポイントです。

「プラクリティ(グナ)の影響で、私の体、感覚、心が働いているだけである」と理解して行われるカルマはアカルマであり、アカルマからは執着は生まれません。

この方法はやや難しいかもしれませんが、同様の結果をもたらすもうひとつの方法があります。

それは、**「神を喜ばせるために仕事をする」**と考えることです。

この考え方には、自分が行為の主人公であるという意識はありません。

「神のために、神の力で、神の道具となって働く」という考え方です。

「自分の力ではなく、神の力で」なのでカットリットワがなく、「自分が楽しむためではなく、神を喜ばせるため」なのでボクトリットワもありません。

また、働く人、仕事、仕事の対象、仕事の目的、の違いがなくすべてが神なので、ベーダ・ギャーナ(分離意識)もありません。この状態でのカルマはもうアカルマです。

では神を信じていない人間は、どのような態度でカルマをすべきでしょうか？

すべての仕事を他の人への奉仕と考えて行うのです。

神のことを考えなくてもよいので、一瞬たりとも自分がしている仕事を自分のために行っているとは考えないことです。見返りを全く求めず、すべての仕事を他の人のために行います。

このやり方でも執着がないので、カルマはアカルマになります。

以上説明したような態度でカルマに取り組めば、結果は全く違います。

カルマをする人を分類しましたが、プラクリタは無知で善悪の区別がつかず、カルミーなると聖典を勉強していてある程度分別はありますが、まだ欲望があります。

そうではなく、「カルマ・ヨーギとして仕事をしてください」というのがシュリ・クリシュナのアドバイスです。カルマ・ヨーギのカルマはアカルマです。

アルジュナはまだ準備が出来ていないのに、アカルマ(戦わないこと)を求めています。

そうではなく、プラクリタよりはカルミーに、そしてカルミーからさらに進んでカルマ・ヨーギになって仕事をしなさい、とシュリ・クリシュナは言っています。

そしてもっと進めば最終的に本当の無活動、カルマ・サンニャーサの状態になります。